

Y07a 天文学に関する個人の文脈としてのサイエンスコミュニケーション

縣 秀彦 (国立天文台)

専門家と非専門家との間でのサイエンスコミュニケーションにおいては、従来の科学啓発活動にありがちな「欠如モデル」のような一方向の伝達ではなく、情報がクモの巣状に複合的に結びついていく「ウェブモデル」や「コンテキスト・アプローチ」、すなわち、市民は無知ではなく、自分自身の豊かな知識と経験によって、そして学校教育だけでなく多くの社会的相互作用を通じて身に付けたアプローチによって、新しい情報に対応することができるという考えが重要であると指摘されている (Wynne, 1995、他)。

このようなモデルに沿って、日本においても 2003 年頃より市民との対話を目指した「サイエンスカフェ」や、2009 年以降大人を対象とした地域での「科学フェスティバル」が始まっている。政策的にも第 3 期科学技術基本計画においては科学技術振興調整費等により科学技術コミュニケーターの養成や科学技術リテラシーの研究が行われた。しかし、サイエンスカフェ等の SC イベントや SC 人材養成事業が増えてはいるが、これらは元々科学に興味が高い人たち向けの活動に過ぎず、政策レベル、機関レベルそして個人レベルで行われている個々の SC 活動が、現状としては必ずしも連携・共有されていないと分析すべきであろう。

本研究では、SC を「科学というものの文化や知識が、より大きいコミュニティの文化の中に吸収され、変質し、その結果が科学にも跳ね返ることで、社会全体や個人に影響を与えていく過程」と再定義し、サイエンスは利便性や経済発展のためのみではなく、市民同士または市民と専門家がサイエンスを通じて繋がっていくことで、精神的に豊かに生きるための糧、すなわち科学文化として必要であるとする個人の文脈に沿って、近年の天文学コミュニティにおける SC 活動を考察し、天文学を中心とした SC 活動の可能性と課題について検討する。